

地域社会は祭りにおいて COVID-19 陽性者をいかに受け入れたか — 祭礼組織活性化に繋げた事例からの一考察 —

荒川 裕紀*

How Local Communities Accepted COVID-19 Positive People at Festivals -A Case Study on the Revitalization of a Festival Organization

Hironori ARAKAWA

ABSTRACT

From the beginning of 2020 to the present, COVID-19 has been raging wildly, causing many deaths. At the same time, society has changed dramatically. This paper discusses how the organization of local community-based festivals has changed in the wake of the COVID-19 outbreak. It is generally pointed out that this epidemic disaster has weakened social relations. However, in the case studied here, the number of festival members has not decreased, on the contrary, it has been on the increase. How did this happen? Based on interviews with the festival organizers, it is examined the role of festivals in a society that is living with the coronavirus disaster. As a result, it is concluded that the fact that the founder of the organization was the first to be affected by the disease and then recovered and that this fact was accurately communicated to the local people, weakened the factors that inhibited the affected people and, conversely, established the acceptability of the local community. This is a good example of how the original intensity of social relations contributed to overcoming this pandemic.

KEY WORDS: Folk knowledge, Urban festival, Sustainable relations, COVID-19, Social relations

1. はじめに

2020年初頭より、2023年の現在に至る間、コロナウイルスは大いに猛威を振るい、当初は致死率も高く、人的被害は甚大であった。そのために、全世界的に大きな変化を強いられる時期となった。

本論考は、このコロナ禍での地域社会における祭礼についてのものである。同様の報告として、本報告者は令和2年・令和3年度の本報紀要(63号・64号)において、「ポストコロナにおける都市祭礼の在り方に関する一考察」¹⁾および「ウィズコロナにおける都市祭

*教養学群

礼の在り方に関する一考察—平成期における西宮神社十日戎開門神事福男選びの変遷から—²⁾によって、兵庫県の西宮神社(西宮まつり・十日戎開門神事福男選び)の祭礼自体の変化、さらに63号の論考では、兵庫県明石市の2神社(稲爪神社・岩屋神社)におけるえびす神を祭神とする祭礼(十日戎)も含めて、歴史的な変遷も挙げた上で論述した。

当論考においては、この西宮の祭礼の中で、コロナ罹患者が出た場合、その祭礼組織がいかに変化したのかについて、祭礼組織におけるメンバーの事例から言及するものである。一般的には、この疫禍によって、社

会的関係が希薄になっているとの指摘が多くなされている。しかし長年本報告者が参与観察を主とした調査を実施している西宮神社の一大祭礼である、「十日戎開門神事福男選び」の催行を実施する「開門神事講社」においては、2020 年から現在に至る 3 年超に関しては、人数の大幅な減少には繋がらなかった。同様に、西宮神社における開門神事講社同様の祭礼執行組織である、「神輿奉賛講社」に至っては今後の人員増加が見込まれていることが現地調査の段階で明らかになった。このコロナ禍の中、どのような事象が、組織の維持と講員の増加へと繋がったのか。2021 年から 2023 年の 3 年間の西宮神社の例大祭である、「西宮まつり」の実施内容も報告した上で、神輿奉賛講社の創設者である、副講長へのインタビューから、この講社の成り立ち、社会的な機能を明確にし、コロナ禍で何が起き、どのような変遷を経たのかを明らかにしたい。

さらに当研究に関しては、JSPS 科研費 JP23H00881 「COVID-19 陽性者と家族・職場・地域社会の関係性の変容：パネル調査による検証」の一部としても位置付けるものである。上記調査研究の主題は、「COVID-19 への感染が陽性者自身と家族・職場・地域社会の関係性に与えた影響をパネル調査によって多角的に明らかにするもの」である。研究チームとしての目的は、①感染の結果、何が関係性の変容に強く影響を与えたのか、②影響を受けた関係性は継続してしまっているのか、③関係性が悪化したままの場合、修復する手立てはあるのか、の 3 点を明らかにすることを目的に研究を進め、新たな知見の獲得を目指すものである。本論考は、この定量的調査における相互補完的な質的調査としても位置付けられるものである。

2. コロナ禍における祭礼研究

コロナ禍以降、地域社会を如実に反映するともいえる祭礼研究は国内外で実施され、報告も挙げられている。国内で顕著なコロナ禍における祭礼研究としては、武田俊輔氏の滋賀県長浜の曳山祭りの研究が挙げられる。このコロナ禍における祭礼の継続について、武田氏は歴史的に培われてきた地域社会のレジリエンス(回復力)を見る視点とソーシャル・キャピタルの大きさが復興にどの程度影響するかを検証した。³⁾

論考の中で、長浜の曳山祭りに関するレジリエンスに関しては、「それぞれの家と町内における世代を越えた全体的相互給付関係の論理」であったとする。家と町内の先祖が長年にわたって注ぎ込んできた資金や労力といった資源が、今回限りで祭礼が継承されない事態になれば、見返りが無いまま無に帰してしまうとい

うのである。これまでの注ぎ込んできた資源がまさに、「戦争や災害も含めた、これまでの祭礼の数々の危機を乗り越えさせてきた機動力である。」と結んでいる。2020 年の曳山祭りは中止されたものの、2021 年には縮小する形で復活をした。この復活に関しては、当地では、地方自治体や教育委員会、学校などの組織との連携が大きかったと述べている。

本報告者が 25 年以上調査地としている、兵庫県西宮市の西宮神社においては、本報告者はコロナ禍における調査を例年 1 月 10 日に斎行される、「十日えびす開門神事福男選び」と、9 月下旬に斎行される例大祭である「西宮まつり」の 2 つの祭礼に関して、コロナ禍の拡大が始まった 2020 年より継続実施している。2020 年 9 月の西宮まつりに関しては、縮小しながらも実施し、コロナ罹患者が急増した 2021 年 1 月の十日えびす開門神事福男選びに関しては、「走り参り」はしなかったものの、午前 6 時には例年通り門を開門し、初参りの意味を持たせた静かな参拝形式を実施することによって「開門神事」は継続したことを本校紀要 64 号、65 号にて報告している。

9 月下旬の例大祭である、「西宮まつり」における聞き取りでは、祭礼の形態の違いもあり、武田氏の長浜の曳山祭りで指摘した、歴史的な地域社会のレジリエンスでの「それぞれの家と町内における世代を越えた全体的相互給付関係の論理」はあまり見られず、即応的な社会関係の希薄化を危惧するために参加する祭礼関係者が多かった。

1 月 10 日の「十日えびす開門神事福男選び」に関しては、地域の祭礼というよりも、十日えびす(十日戎)自体が近畿圏内からの社寺参詣の意味合いが強く、福男選びは、近年は報道の影響から、全国的な認知度の高い「年中行事」としての意味合いが強く、地域の祭礼というよりも斎行主体である西宮神社の意向が強い神事と言える。おりしも 2021 年 1 月は感染拡大を始めた時期であったこともあり、接触を極力避けるため、走り参りは神社として避けた。しかし、十日えびすの原点ともいえる、「忌籠りとその後の開門」は実施することで、神社としての伝統は守り抜いたと本報告者は指摘した。

両事例とも、地域社会の中で認知されている祭礼ではあるが、「十日えびす開門神事福男選び」同様、「西宮まつり」においても、阪神大震災以降、「西宮まつり協議会」の成立過程からも神社自体が主催している側面が強い。都市祭礼の中でも、斎行に際して神社の意向が強い祭礼は見受けられるが、西宮地域の事例においては、そのイニシアチブがあったからこそ、伝統の継

続が可能となったともいえる。

今回の調査対象はその西宮神社における、祭礼執行組織の中で、特に祭礼において重要な意味を持つ、御神体を載せる神輿行列を担当する組織についてである。次項では、現在の西宮神社においては年間を通じ、どのような祭礼があり、神輿はどの場面で必要とされているのかについて提示したい。

3. 西宮神社における祭礼

現在、西宮神社の祭礼としては、以下のものがある。以下の表は、西宮神社のホームページ「年中行事・祭典」⁴⁾より抜粋したものである。

表1 西宮神社における主な祭礼

月日	祭礼名
1/1	歳旦祭
1/2	奉射事始め祭
1/3	元始祭
1/5	百太夫神社祭
1/9-11	十日えびす
2/17	祈念祭
5/1-10	(諸国講社) 太々神楽祭
6/14	御輿屋 (おこしや) 祭
6/30	夏越大祓
7/7・7/9-10・7/20	夏えびす
7/31	末社住吉神社夏祭り
9/21-23	例祭・西宮まつり
10月第一土曜・日曜	宮水まつり
11/20	誓文祭
11/23	新嘗祭

特に西宮神社特有の祭礼と言えるのは、1月5日の「百太夫神社祭」、1月9日から11日の「十日えびす」、5月1日から10日の「太々神楽祭」、6月14日の「御輿屋 (おこしや) 祭」、7月の「夏えびす」、9月21-23日の「例祭・西宮まつり」、10月の「宮水まつり」であろう。

7月の夏えびすは、七夕と夏休みの始まる時期の間、ちょうど1月の十日戎 (初戎) から半年経ったということもあり、近年創設された行事である。10月の宮水まつりは平成元年に生まれた祭りである。「醸界タイムス」に以下の説明がある。

西宮市内に蔵を構える清酒メーカーが、「宮水」を発見した山邑太左衛門氏へ感謝するとともに、灘の酒

に欠かすことのできない「宮水」をより多くの消費者に知ってもらい、大切な水資源の保全にも協力してもらいたいとの願いを込めて開催している⁵⁾

灘の生一本を作り出す、酒造好適水である「宮水」を神前に供える神事である。創始が1980年代後期であり、歴史的なものではないが、この宮水の発見が、江戸期以降の繁栄をもたらし、現在でも主要産業の1つに数えられる、「酒造都市西宮」を記憶する祭礼であると言える。

百太夫神社祭は境内末社の祭りであるが、百太夫が芸能を司る神であり、室町期に「えびす舞」を演じ、えびす信仰の勢力拡大を担った、人形浄瑠璃・文楽の祖と言える「傀儡師 (くぐつ)」が西宮神社周辺に住んでいたことから、現在でも祭礼が実施されている。

5月の「太々神楽祭」に関しては、太々神楽自体は様々な神社で実施されるが、西宮神社のそれは、えびす信仰に関係する、全国に拠点を持つ「えびす講社」が、5月上旬に総本社である西宮神社に参集し、各講社が神楽を奉じたことが起源である。つまりえびす信仰を同じくする全国の人々が、総本社に巡礼し、それを祝った祭りともいえるものである。

6月の「御輿屋 (おこしや) 祭」は、えびす神 (蛭子大神) が鳴尾 (現西宮市東部) の漁民によって「発見」され、西宮神社に鎮座された日を祝つての祭礼である。道中、疲れて寝てしまったえびす様を「起こそうとした」が、えびす様の耳が遠かったため、お尻をつねって起こしたという伝承から、「尻ひねり祭り」とも呼ばれ、近代に至るまで、参詣人同士が尻をひねる祭りであったと呼ばれる祭りである。西宮神社前宮司の吉井良隆氏は、

これは、若い女性にとっては、いわば「成人祝」でもあったようですが、近代になってからはこの習慣はなくなってしまいました。⁶⁾

と述べている。えびす様を迎える日であり、気候が夏に向かう頃で、西宮ではこの時期から新しい浴衣に着替えるという、「更衣」の時期であったという。現在では浴衣姿の「びわ娘」が参拝客に枇杷を配っている。

西宮まつりは例年9月21日から23日までの3日間催行される。22日に西宮神社でのもっとも大切な祭りである「例祭」が開催され、それを挟む形で、21日に「宵宮祭」、23日に「渡御祭」が催行される。

22日の午前10時に斎行される例祭の後、稚児行列や、氏子区域から約30基の「こども樽みこし」が市内

の中央商店街などを練り歩く。23日は「渡御祭」が催行される。午前には氏子内の当番地域（現在では小学校校区が基になっている）を神輿と時代行列が巡行し、昼からは新西宮浜ヨットハーバーに移動し、7隻ほどの船団に祭礼関係者が乗り込み、西宮浜を船で巡行し、御前浜沖にて海上安全を祈願する「かざまつり」が斎行される。現在では船団のうちの1隻が、えびす様が出現したとされる、兵庫の和田岬まで巡航し、故郷を巡る「産宮参り」を行う。さらに10年に一度は、船団全船が西宮港を出て、和田岬まで訪問し、祭礼関係全員で産宮参りをする。なおこの3日間とも、氏子青年会である「若戎会」は西宮市中や神戸和田岬周辺にてこの縁日を祝い、だんじりの巡行をする。

この祭礼の創設は平安後期ともいわれ、和田岬への海上船渡御を考えると、当時の西宮神社と平氏政権との関係も大いに関係があったと考えられる。戦国期に海上船渡御は廃止されたが、約400年後の阪神大震災後の2000年に、震災復興の意味を込めて復活した。その経緯の中で、陸上の神輿行列や時代行列も大規模になっていった。

そして、西宮神社において最大規模の祭礼が、「十日えびす」である。これは初戎とも呼ばれ、祭神であるえびす（蛭子大神）の年初の縁日である。西宮神社の縁日であり、えびす神を迎えるために、社中にて精進潔斎である「忌籠」が実施され、その忌籠明けの10日の早朝より「本えびす」としての氏子地域からの参詣があった。それが変化する形で現在の走り参りである、「福男選び」へと繋がっているのである。

以上から、長い歴史を持ち、西宮神社独自の発展を遂げたものとしては、「(諸国講社) 太々神楽祭」、「御輿屋祭」そして、63号・64号で取り上げた例祭である「西宮まつり」と「十日戎」の4つが特に挙げられる。

他地域に比べて、神社の役割が比較的高いことは前項で述べたが、祭礼の実施にあたっては、神輿の担ぎ手やだんじり（地車）の引き手が必要となる。その任は地域氏子の若手青年会、「若戎会」が長年担ってきた。しかし年を経る中で、神輿よりもだんじりを引くことが氏子青年会「若戎会」の活動の中心となった。しかし2000年に例大祭が「西宮まつり」の形で再構築がなされ、海上船渡御が復活したのと同時に、神輿巡行を中心とした陸渡御の規模も以前よりも大きくなった。その中で必然的に神輿を担ぐ人たちが時代装束を来た行列奉仕のための人員確保が課題となっていったのである。その中で、成立したのが「神輿を専門で担ぐ組織」であった。

5. 西宮神社神輿奉賛講社の設立

現在、西宮神社の神輿を担ぐ組織としては「西宮神社神輿奉賛講社」が存在する。当該講社における先行研究としては、広東外語外貿大学から神戸女学院大学に客員研究員として2013年より1年間、西宮神社を調査された劉勁聰氏の「西宮神社の講社組織に関する一考察 ―神輿奉賛講社の結成と運営を事例に―」⁷⁾がある。氏はこの西宮神社神輿奉賛講社の設立過程と役割、そして運営の実態について、明らかにされ、詳細に述べられている。

この論考の中でインフォーマントとして出てくるのが、この組織の創設者とも言える、岩崎正夫氏（2023年現在、61歳）である。この岩崎氏に関しては、本報告者も15年以上の繋がりがある。今回の論考に関しては、2023年秋に実施した、氏への聞き取りを基として、当該奉賛講社の設立過程、コロナ禍における講社の動きと講員同士の関係の変化について明らかにしたい。



写真 1：西宮まつりにおける岩崎正夫氏（2023. 9. 23）
神戸市兵庫区和田神社にて報告者撮影

劉氏の論考においては、奉賛講社の設立に関しては、2006（平成18）年辺りに神社から「布団太鼓」を復活して欲しいとの話から、設立に至ったとある⁸⁾。

岩崎氏は大阪府の八尾市にて育った。当地は現在7つの布団太鼓が練り歩く「高安まつり」が有名であり、その環境の中で祭り好きとして成長した。造園土木の専門家として2000年辺りに西宮市に移住したが、1995年の阪神大震災の際にも堺市からボランティアとして西宮に派遣され、得意分野であった水道の補修なども実施した経験があり、「何かと西宮には縁があったのでは」と話されている。

この祭り好きの岩崎氏が、祭礼の賛助組織を立ち上

げようになったきっかけは、劉氏の論考では以下の様に出てくる。

「講社の前身は青少年の育成のために近所の親たちが組織したクラブでした。クラブ名は特にありませんでした。クラブ活動では地域の小、中学校に行つてバーベキューやお餅つき大会などのイベントを行います。神社のお祭りにもよく参加しています。」⁹⁾

この地域社会の組織が、神輿奉賛講社へと発展した。この経緯から、この神輿の奉賛には青少年が必ず存在し、彼らの育成のためという機能が存在することを劉氏は指摘している。

私が今回改めて岩崎氏に聞き取りを実施した際に明らかになったのは、この近所の親たちが組織した「近所の親たちが組織したクラブ」とは、子どもたちが通う「保育園の父母会」が始まりであったということである。2004年から2005年に至るインフルエンザの流行の際に、子どもたちの感染症予防のための対策の励行や、防疫の研修などが頻繁に実施され、父母会の結束が非常に強まったとのことである。この地域に根差した父母たちの繋がりが、以降の「近所の親たちが組織したクラブ」へと発展したとのことである。

この父母会の活動していた地が西宮神社の氏子地区（市内の小学校区と符合しており、浜脇・用海・安井・香櫨園の各地区）と重なっていたこともあり、例大祭における、「こども樽みこし」への奉賛と繋がった。岩崎氏自身、出身地での布団太鼓奉仕の経験もあり、何より祭り好きであったために、この西宮神社における祭礼に関わっていくことに繋がった。

前項で述べた通り、元々は氏子青年会「若戎会」が神輿とだんじりの賛助をしていたが、だんじりの活動の活発化に伴い、神輿を担ぐ人員が不足した。そのため、2000年以降、西宮まつりが震災復興の中で巨大化する中で、神輿の担ぎ手として、当初は神社が外部の方々を公募に近い形で参加させていた。岩崎氏へのインタビューで明らかになったことは、この一般公募の奉仕者のうち、「地域の大事な祭礼奉仕をしている感覚がなく、行儀が悪い」方も散見されたとのことである。

結果、神社としては、「御神体を載せた神輿」でもあり、必然的に担ぎ手たちに「行儀の良さ」を求めたのである。その中で、地域との繋がりが強固であり、神輿を中心とした祭礼文化に造詣が深く、こども樽みこしでの奉仕経験もある、岩崎氏の地域の父母会グループにお願いされたとのことである。

2000年より、西宮まつりに関する参加観察を実施し

ていた本報告者であるが、2000年前後と2006年辺りでは、担ぎ手の人々の変容があったこと、具体的にはそれ以前よりも地域に関係のある人々が多く担ぎ手になっていることを当時の参加観察にて記録している。この参加観察における変容の実際が、今回の聞き取りで改めて明らかになったのである。

ここで確認したいのは、西宮神社の祭礼の中で、神体を載せるのが「神輿」であり、2006年辺りに岩崎氏が西宮神社から復活を頼まれたのは、「布団太鼓」である。この布団太鼓は地域によって、「太鼓台」「布団太鼓台」「布団神輿」「布団みこし」と多様な呼称のあるものである。岩崎氏自身が西宮神社の広報誌「西宮えびす」の平成19(2007)年夏号の「布団みこし復活」の項の中で、次の様に述べている。

布団太鼓台は、古くから五穀豊穡を祝い、又願い、神輿やだんじりと同じ様に大勢の若者によって、町内(村内)を担ぎ渡ったと聞いています。

布団太鼓は、氏子の村に一台有り、お祭りの時に氏神たる神社の神輿に、お宮さんから神様にお入り頂き、村中においてに成られた時に赤い五枚の座布団にお座り頂いて、村内を見させていただく物である、と小さい頃より聞かされてきました。

(中略)

西宮神社は、20年程を最後に出なくなりました。それが昨年の西宮祭りを期に復興されました。担ぎ手は中学・高校生を中心に20から30人くらいで担ぎました。¹⁰⁾

布団太鼓が地域の祭礼にて担がれる主な地域は、大阪府の河内・泉州地域、又は兵庫県の播州・淡路地域であり、西宮の所在する摂津(兵庫県東部から大阪府北東部)では、従来はあまり見ることのないものである。岩崎氏への聞き取りでは、西宮市内の材木商等が約40年前にこの太鼓台を制作していたことがあり、浜脇中学校などに保管されていたとのことである。河内地域にある、布団太鼓による祭礼が盛んな八尾市で育った岩崎氏に神輿自身の活性化(地域住民の団体主体での奉仕)と以前存在した布団太鼓(西宮では布団みこしと呼称)の復活をお願いすることとなったということになる。2006年、西宮神社を主体とする「西宮まつり実行委員会」がその布団みこし復活の調整の中で、依頼を受けた岩崎氏が積極的に動き、みこし(布団太鼓)の新調と奉仕者の手配まで「全面的にご尽力頂きました」と、先述の西宮神社広報誌「西宮えびす」の平成19(2007)年夏号「西宮えびす」にはある。

当初は、愛好会「布団神輿愛好会」であったが、2008 (平成 20) 年に西宮神社の正式な講社組織、「神輿奉賛講社」として設立されることとなった。西宮神社神輿奉賛講社規約の中では、事業内容は次の 5 つである¹¹⁾。

- (1) 西宮まつりでの神輿の奉奉
- (2) 各地域神輿保持団体の親睦と交流
- (3) 神輿に関する伝統文化事業の継承と促進
- (4) 神輿に関する伝統文化事業の広報啓発
- (5) 神輿を通じての青少年の育成
- (6) その他本会の目的を達成するために必要なこと

劉氏は、当該講社は「お神輿を担ぐ」と「青少年の育成」の 2 つがキーワードであると指摘した¹²⁾。これは本報告者も同意するところである。元々保育園の父母会が母体だったこともあり、青少年の育成がそのまま残ったとも考えられる。神輿とともに創設者である岩崎氏の育った地域の祭礼の重要な道具である、「布団太鼓」も「神輿」のなかに包含されていることも着目すべき点である。

本報告者は、西宮神社での調査と共に、同時に開門神事を保存する活動を 2004 年より開始し、「開門神事保存会」という組織を開門神事福男選り参加者ともに結成した経緯をもつ。この組織が神輿奉賛講社と同様に西宮神社の正式な講社として成立したのが同じ 2008 年である。この 2 団体が講社となった動きは、当時、西宮神社の管理運営下・行政の監督での齋行が求められた社会背景も大きい。祭礼の執行主体をより明確化し、神社自身の祭礼におけるガバナンスの強化を行ったともとれる。様々な地域から移住してきた人々が、神輿や開門神事という祭礼で繋がり、正式な講社としたのである。

特に西宮まつりのような神輿の賛助に関しては、以降は正式に神輿奉賛講社が担当することが決まり、以降 15 年程、現在の状態での祭礼の齋行が続いている。

6. 2020 年から 2023 年の西宮まつり

前項の祭礼執行の形式が順調に機能をしていた、2019 年以降、世界はコロナ禍に見舞われた。西宮まつりに関しては本報告者は、2020 年度の論考で、2020 年 9 月の「西宮まつり」の状況について報告した¹³⁾。

具体的には祭礼を「中止・延期」したのではなく、形態を変化させながらも「催行・継続」したのである。例えば例年は 3 日間催行するところを、9 月 23 日の 1 日のみに短縮して催行された。全世界の祭礼が中止・延期される中で、縮小しながらも例祭を含めた「西宮

まつり」を催行したことは、当事者にとって大きな決断であった訳であり、「まさにポストコロナ・ウィズコロナを考慮した祭礼を考える上で大きな前進になった」と本報告者は論じたが、2020 年 9 月当初は、感染拡大がある程度抑えられていた事情があったために催行できたとも言えた。



写真 2 : 2020 年の海上船渡御 (2020. 9. 23)
新西宮ヨットハーバーにて本報告者撮影

しかし、リスクを冒してでも催行する必要があるという強い信念と祭礼関係者の強い要望が 2020 年 9 月当時の結果に繋がった訳であった。



写真 3 : 2021 年の西宮まつり本殿祭後の代表者と神職
(2021. 9. 23) 西宮神社にて本報告者撮影

しかし 2021 年度に関しては、新型コロナ感染拡大で緊急事態宣言が延長されたことから、大幅に変更された。例年は、21 日の宵宮祭、22 日の例祭、23 日の渡御祭が実施されるが、2021 年度は陸渡御、御旅所祭り、海上渡御はすべて中止され、23 日の渡御祭は本殿祭のみとなった。本殿祭というのは、西宮神社の拝殿で西宮まつり実行委員会のメンバーの中でも代表者のみが祭礼に出席する形であり、「最低限の継続」となった。

2022 年度に関しては、感染状況が大幅に改善されたこともあり、3 年ぶりに祭礼奉仕の人員を増加させ、平安時代を起源とする西宮から和田岬まで神輿が巡幸する、大規模な海上船渡御も企画された。本校学生も 6 名、卒業生 2 名が時代行列に賛助することとなった。宵宮祭、例祭なども齋行され、だんじりも市中を巡行した。



**写真 4 : 西宮まつりでの時代装束を着た本校学生たち
(2022. 9. 23) 西宮神社にて神社関係者撮影**

生憎、9月23日の渡御祭（神輿・海上船渡御）に関しては降雨のため中止となり、本殿において祭典のみ執り行われることとなったが、学生たちは、時代装束や法被に着替え、地域の方々と共に少しずつ復活しつつある地域の伝統行事の中に身を置くことが出来た。



**写真 5 : 2023 年の海上船渡御における本校学生
(2023. 9. 23) 神戸市中央区海上にて本報告者撮影**

2023 年は、コロナ禍もようやく落ち着き、天候に恵まれたこともあり、宵宮祭・例祭・渡御祭の3日を4年ぶりに斎行することが出来た。海上船渡御に関しては、コロナ禍前では、通常の渡御祭に関しては、神職が乗る西宮湾を一周して巡る形のものであり、大船団を組んで、和田岬までの渡御は2009年に海上渡御祭再興10周年を記念したものであった。再興20周年を記念し、2019年に大規模な海上船渡御が企画されていたものの、この年は降雨で不斎行となり、その後もコロナ禍と降雨で斎行出来ていなかったものであった。それが2023年になり、ようやく和田岬までの大規模な海上船渡御が出来たものであった。本校の7名の学生と1名のOBが時代行列に賛助したが、まさに海上船渡御の再興、震災復興、そしてコロナからの復活という様々な意味合いを持った歴史的な祭りに賛助することが出来たと言えよう。



**写真 6 : 2020 年マスク着用での神輿奉仕
(2020. 9. 23) 西宮神社にて本報告者撮影**

神輿奉賛講社の活動としても、2020年9月の西宮まつりでは、マスク着用の状態で神輿の渡御を実施していたが、今回の2023年9月における西宮神社における本格的な神輿渡御はコロナ禍からの大きな復活を意味するものであったと言える。

7. コロナ禍に神輿奉賛講社内では何が起きたのか

このコロナ禍の期間、神輿奉賛講社において、コロナ罹患の案件が起きていた。2021年1月、国立感染症研究所の情報では以下の通りであった。

全国の新規感染者数は、首都圏（1都3県）、特に東京での急速な増加に伴い、年末から増加傾向が強まり、過去最多の水準の更新が続いている。また、年明けから、中京圏、関西圏、さらに、北関東、九州でも同様に新規感染者が急増した。

大阪では、新規感染者数が漸減していたが、年明けから急速な増加に転じ、直近の一週間では10万人あたり40人を超えている。年初では、30代までの若年層の感染が目立っている。医療提供体制の厳しい状況が継続。保健所での入院調整も厳しさが増している。兵庫、京都でも感染が急速に拡大し、人口10万にあたり30人を超え、医療提供体制が厳しい状況。滋賀、奈良でも新規感染者数の増加傾向が継続。¹⁴⁾

西宮神社においては、2020年9月の西宮まつりが縮小しながらも、斎行可能だった時期で、十日えびす開門神事福男選びも、規模を縮小しながらも走り参りの上で「福男選び」を斎行することが検討されていた時期であったが、12月になり、罹患者が急激に増加した。その状況から、同月14日に国内旅行活性化のための

GoTo トラベル事業を政府が 2020 年 12 月 28 日から 2021 年 1 月 11 日まで全国一斉に一時停止することを決めた¹⁵⁾。西宮神社の十日えびすもその時期に含まれることから、西宮神社として、走り参りは実施せず、「開門神事」のみ斎行されたのである。

この感染状況拡大の下で、神輿奉賛講社の創設者であり、副講長であった、岩崎氏が神輿奉賛講社内では一番初めに罹患したのである。結果的に家族中が罹患し、市内のホテルに隔離されることとなったのである。幸いにも後遺症も少なく、家族全員が回復し、普通の生活に復帰することとなった。

当創設者であり、祭礼において常に集団を統率する立場である岩崎氏が罹患したこと、そして、幸いにも悪化することなく、社会復帰した事実は、神輿奉賛講社の中においては、有益に働いた。当時は、コロナウィルス感染症については致死率が高かった。全世界において治療法が確立していない未知の感染症として、多くの人々が恐れていた時期である。事実、講社内のメンバーも誰も罹患しておらず、実態を伴った情報が皆無であった。その中で、講社内では指導的な立場にある人物であった岩崎氏が、時間がかかったにせよ、大過なく家族全員が復帰出来た事実は、この講社内におけるコロナウィルス感染症に関して、(容易でないにせよ)乗り越えられる疾病であるという共通認識が生まれることとなった。

「自分たちがコロナにかかったことで、逆に講社内での安心感につながったのではないか。」(2023 年 9 月のインタビューより)

と岩崎氏は語る。その結果、講社内にて「病の人には積極的に支援を実施する」風潮が増加した。

「支援は嫌がられる位にやったら良い。これは自分の信仰上の篤さゆえのことでもある。まさにこの講社だからできることである。」(2023 年 9 月のインタビューより)

として、コロナで困っている人々を励ますための支援を実施したのである。このことが功を奏したのかは不明としながらも、このコロナ禍によって組織としては更なる関係を構築することに成功し、講社員の数が 35 名程度から 50 名程度に増加したと語る。多くの祭礼組織がコロナ禍によって減少の憂き目を見ている中で、希少な事例として捉えることが出来るだろう。

8. 神輿奉賛講社の機能 一創設者の語りから

上記の「支援は嫌がられる位にやったら良い。」という岩崎氏の語りは、この講社の原点を想起させる。設立前の組織が、保育園の父母会であったこと、そしてその父母会の結束のきっかけが、2004 年から 2005 年にかけてのインフルエンザの流行であったと述べた。つまり、劉氏も論考の中で、講社の規約に触れながら、当講社組織が、「お神輿を担ぐ」と「青少年の育成」がキーワードであると指摘している通り、祭礼の執行組織であるのと同時に、保育園の父母会を原点とした広義の地域コミュニティの互助組織的な機能を持たせていたのである。

コロナ禍の起こる 10 年ほど前、つまり神輿奉賛講社が成立前後から、氏は「地域の中での駄菓子屋」を始めた。いわばコミュニティ内の学童保育の補助をインフォーマルに機能させる施設である。学校などのフォーマルセクターでの教育やコミュニティ内における子どもたちの状況を真っ先に感知する役割も担っていたと岩崎氏は話す。コロナ禍が到来して以降、このような活動を発展させ、西宮神社の境内にて毎月第 4 日曜日に実施される、クリエイターのオリジナル作品が売買されるマーケットイベントである、「てづくりサーカス」の中で、「こども食堂・祭(まつり)」を展開している。その理由としては、コロナ禍で困窮している児童も散見されるようになってきたことを挙げられた。以下は岩崎氏の語りである。

「本当はタダでも良いから、おなかの空いている子どもたちには一杯食べさせてあげたい。神社や実施団体から、マーケットイベントにて出店する性格上、無料は良くないと要望もあり、無料で提供は行っていないが、儲けを度外視した価格で提供している。やはりどの子も我が子！の気持ちで助けてあげないと思っている。」(2023 年 9 月のインタビューより)

岩崎氏には、講社外の活動として、なぜこのような活動を発展的に開始されるようになったのかについて、聞いてみたが、その原因としては、自分自身が幼少期に「地域内で育った」ことを挙げられた。氏が生まれ育った時期の八尾は、地域内の相互扶助的なコミュニティが活発な地域だったと話し、この経験が、現在の西宮での活動に繋がっていると話した。また彼は、彼の活動する西宮神社の氏子地域(主に浜脇地区)について、以下の様に話した。

「西宮は神戸と大阪の間にあつて、大都会なんやろ

うなと思う。でも俺から見ると大都会の中のめっちゃ田舎なんよね。」(2023年9月のインタビューより)

彼の語りにある、「大都会の中のめっちゃ田舎」とは、阪神間の都市ではありながら、旧来の社会が持っていた、コミュニティの紐帯が残っている地域であるとの指摘であろう。様々な地域からの移住者も多く、ややもすれば人間関係が希薄になってしまいがちな地域でもあるが、その中で岩崎氏が相互扶助的な倫理観を持ち、行動力でもって実行できたからこそ、「大都会の中のめっちゃ田舎」が創出され、それが継続、再生されることに繋がったとも言えよう。そして、この行動力が、布団太鼓(布団みこし)の復活と、西宮の浜脇地域を中心とした新たな相互互助的な機能を持たせた「神輿奉賛講社」の誕生へと繋がったことを改めて確認した。

9. 考察：コロナ禍以降増加した祭礼組織からの学び

このコロナ禍において、世界中で祭礼が中止延期にまたは規模縮小を余儀なくされた。それに伴い、祭礼の実施団体の運営・継続が困難になった地域も散見された。コロナ禍が収束し、祭礼の再開・復活をする地域も2023年に増加しているが、この4年間でコミュニティと人間関係の再構築が問題となる地域も多い。

当論考における調査事例である「西宮神社神輿奉賛講社」は、祭礼催行メンバーの人数も減らすことなく、逆に増加したという事実は、減少に悩む多くの地域祭礼にとってのモデルケースとなり得る。

特に祭礼実施団体の人間関係を考える上で、この講社の事例が先駆的なケースと考えられるのは、この祭礼団体の創設者であり、今もなお講社の中心人物である岩崎氏自身がこのCovid-19に罹患し、それに超克した事実であり、その後、他の祭礼メンバーが彼を受け入れ、さらに組織として、すすんで罹患者の支援を考え、それに付随するような社会貢献活動へと発展させたことである。科研費の申請をした2022年時点では陽性者自身の関係性の変容に焦点を当てた研究は殆ど出ておらず、これからの世界中での研究の成果が待たれるわけであるが、神輿奉賛講社の事例は世界の祭礼研究はもとより、感染症の時代における社会関係を考える事例研究としても着目される。

今回の面接法により質的調査の結果、「1. はじめに」の項で挙げた、3つの問いに関して、「①感染の結果、何が関係性の変容に強く影響を与えたのか」に関しては、関係性の変容に関しては、講社内での紐帯が逆に強まったことである。その理由として、組織内の中心人物が比較的早期に罹患し、回復したという情報が、メ

ンバー内に比較的正確に伝わったためにネガティブな変容が最小限に収まったこと。逆に風評被害を打ち消し、罹患者や社会的弱者への支援へと動き出したことが挙げられる。

「②影響を受けた関係性は継続してしまっているのか」に関しては、コロナ禍により社会的なダメージが散見されるまで、祭礼執行団体としての役割と共に社会支援活動的な機能を持たせ続けることが予想される。

「③関係性が悪化したままの場合、修復する手立てはあるのか」に関しては、次項の「今後の調査方針」にて改めて述べるが、面接が主に講社の創設者であり、中心的な人物へと聞き取り調査のため、さらに多くの講社メンバーへの面接が必要となる。

まさに「感染症の時代」と言われる21世紀の新たな知見の獲得を目指していく研究方針の中、今回の事例は、創設者とその家族のCovid-19への罹患というネガティブな結果があったのにもかかわらず、関係性が悪化するのではなく、罹患者への理解と包摂に取り組み、さらなる社会貢献のために機能し始めたというところは、この感染症の時代におけるコミュニティデザインの好例となり得るであろう。この理由として、偶然にも当該講社が元々感染症対策で紐帯が強まった「保育園における父母会」から出発していたことも大きい。幸いにも世界中で、今回のコロナ禍の中、コミュニティとして、感染症対策に立ち向かおうとした地域も多いはずである。神輿奉賛講社の成立した事例の特徴は、15年以上前のその防疫対策で動いていた中心人物が、偶然にも祭礼・布団神輿が大好きな人物であったことから、神社・地域を巻き込んだ祭礼執行組織を作り上げたことである。氏の育った社会環境において、祭礼の執行団体は地域内での互助組織であるという認識も大きいのが、彼以外のメンバーにもこの言説がある程度のコンセンサスを得ていたのではとも考えられる。

地域の祭礼団体の社会的な機能の中で、互助的な部分を持つという認識は、この地域と時代の特徴的なものなのか。それとも、より普遍的に語られるものなのか。先行研究も踏まえながら、他事例への調査も続け、比較することが必要である。今回の西宮神社神輿奉賛講社の事例について、現在の段階で言えることは、この感染症の時代を生き残る諸条件と幸運な偶然とを持ち合わせていたということである。

10. 今後の調査方針

今後の調査方針としては、講社内における他メンバーへの面接調査を実施し、この講社の人数が増加し、社会貢献的な役割が増えている結果に対し、更なる考

察を加えていく必要がある。同時に、同じ西宮神社内で活動する他の祭礼執行団体への調査から、コロナ禍をいかに生き延び発展していったのかの報告と検討が必要になるだろう。

そして、定量的なパネル調査を神輿奉賛講社に対して実施し、これを解析することで、今回の事例に関して新たな視点を獲得した上での考察を実施しなければならない。更に、同じような伝統行事や祭礼の継続のために活動している日本国内外の諸団体へも同じような質的・量的な調査も実施し、当事例が地域特有の特殊事例であるのか、それとも普遍的に機能するものなのかを考察していくことで、この時代に即した、まさに感染症の世界を生き抜く知見の獲得を目指していきたい。

11. 謝辞

今回の調査に関しては、神輿奉賛講社の創設者である、岩崎正夫氏には非常にお世話になった。論考内でも挙げたが、氏との出会いは15年ほど前のことである。参与観察の際に、氏から私に声を掛けて下さったことが全ての始まりであった。何か不思議なことがあれば積極的に声を掛ける氏の姿勢は、地域社会を動かす原動力であることを改めて感じた。

先行研究者として挙げた、広東外語外貿大学の劉勁聰氏は、神戸女学院大学での研究期間中、西宮神社にて意見交換をさせていただいた。日本語学がご専門でもありながら、日本の民俗学や文化人類学にも通曉され、現地でも丹念に調査されるフィールドワーカーでいらっしやう。本報告者の拙論にも目を通された碩学であり、まことに啓発された。西宮神社の研究を含めた祭礼研究や日中交流の研究に関する意見交換を今後とも続けていきたい。

西宮神社においては、十日えびす開門神事福男選びを中心として25年以上、調査を続けているが、宮司の吉井良昭氏、権宮司の吉井良英氏、禰宜の吉井良迪氏らをはじめ、神社関係者の方には大いにお世話になっている。この場を借りて御礼申し上げたい。今後も調査を続けていく所存であるが、これは人類学的・社会的な論考としてのみならず、21世紀に西宮神社の周辺でどのようなことが起きていたのかの記録として遺す意味もある。ライフワークとして続けていきたい。

なお本研究は JSPS 科研費 JP23H00881 「COVID-19 陽性者と家族・職場・地域社会の関係性の変容：パネル

調査による検証」の助成を受けたものである。

参考文献・引用文献・出典

- 1) 荒川裕紀：ポストコロナにおける都市祭礼の在り方に関する一考察、明石工業高等専門学校研究紀要、第 63 号、明石工業高等専門学校、pp.14-21 (2021)
- 2) 荒川裕紀：ウィズコロナにおける都市祭礼の在り方に関する一考察—平成期における西宮神社十日戎開門神事福男選びの変遷から—、明石工業高等専門学校研究紀要、第 64 号、明石工業高等専門学校、pp.26-34 (2022)
- 3) Shunsuke Takeda : Continuation of Festivals and Community Resilience during COVID-19: The Case of Nagahama Hikiyama Festival in Shiga Prefecture, Japan, Japanese Journal of Sociology, Volume 31, Issue 1: Challenges of COVID-19 Pandemic to Japanese Society pp.56-66 (2022)
- 4) 西宮神社 : <https://nishinomiya-ebisu.com/event/> (2023.9.15)
- 5) 醸界タイムス : <https://www.jyokai.com/?p=8136> (2023.9.15)
- 6) 吉井良隆：えびす信仰事典、戎光祥出版、p.13(1999)
- 7) 劉勁聰氏：西宮神社の講社組織に関する一考察 — 神輿奉賛講社の結成と運営を事例に—、神戸女学院大学論集、第 62 巻第 1 号、神戸女学院大学、pp.51-61(2015)
- 8) 劉前掲書、pp.55
- 9) 劉前掲書、pp.55
- 10) 西宮神社：西宮えびす、平成 19 年夏号 (通算第 27 号)、西宮神社、pp.3-4 (2007)
- 11) 劉前掲書、pp.54
- 12) 劉前掲書、pp.54
- 13) 荒川裕紀：ポストコロナにおける都市祭礼の在り方に関する一考察、明石工業高等専門学校研究紀要、第 63 号、明石工業高等専門学校、pp.14-21 (2021)
- 14) NIID 国立感染症研究所「新型コロナウイルス感染症の直近の感染状況等 (2021 年 1 月 13 日現在)」：<https://www.niid.go.jp/niid/ja/diseases/ka/corona-virus/2019-ncov/10139-covid19-ab21th.html> (2023.9.15)
- 15) 日本経済新聞「GoTo トラベル全国で一時停止 12 月 28 日～1 月 11 日東京・名古屋・札幌・大阪は先行」：<https://www.nikkei.com/article/DGXZQOFS147PS0U0A211C2000000/> (2023.9.15)